



「山古志の牛飼いと
中越大震災に思うこと」

肉用牛経営：

新発田市大字本田丁 猪股 一直氏

実態調査を定期的に行い、その結果を公表する。

(2) SRMによる枝肉等の汚染防止措置の評価
方法について研究開発

厚生労働科学研究において、と畜処理工程における枝肉等のSRM汚染防止措置の評価方法を開発し、と畜場における実用化を進める。

3 飼料規制の実効性確保の強化

(1) 飼料規制については、肉骨粉が輸入禁止とされるとともに、牛用飼料への動物性蛋白質の含有禁止等の措置が講じられているが、更に、以下により飼料の輸入、販売、使用段階における検査・指導を強化する。

- ① 輸入段階については、現行の輸入飼料の種類
の届出に加え、新たに、原材料名を対象とし交
差汚染の有無の検査を実施する。
- ② 販売段階については、現行の卸販売業に加え、
新たに、小売販売業者を届出義務の対象とし、
飼料の混入防止のため監視、指導を徹底する。
- ③ 使用段階については、飼料規制について農家
に対する周知・徹底の強化を図るとともに、都
道府県による農家に対する立入検査等を強化す
ることにより、飼料の誤用・流用を防止する。

(2) 平成16年12月から牛肉の個体識別制度の流通
段階における措置が施行されたことから、その
確実な実施をはかる。

また、平成16年度から死亡牛検査の全都道府
県における実施体制が整備されたところであり、
引き続き死亡牛を含むリスクの検査を継続して
行う。

4 調査研究の推進

引き続き、厚生労働科学研究において動物接
種試験等BSEに関する研究事業を継続するとと
もに、農林水産省プロジェクト研究において牛
への経口接種試験を行い、異常プリオン蛋白質
の蓄積メカニズムの研究を進める。

昨年10月に本県中越地域を襲った大震災。新聞、
テレビ等マスメディアを通じて見聞きする震源地の
息を呑む惨状に、これが現実の出来事なのかとしば
らく信じられないほどの衝撃を受けました。そして
同時にこの震災に遭われた多くの被災者の中に、私
たちと同じく牛飼いを生活の糧とする人達の牛と地
域の人々の絆の深さに強く心を打たれました。

地震直後に牛舎から放たれ、水や餌を求めてぬか
るみにはまり身動きが取れないでいる牛、谷底まで
下り行き場を失った牛たち。これらの牛達を危険を
顧みず我が子を助けるかの様に必死な思いで救出
し、そして優しくいとうしむ人達の深い愛情、そし
て他人を思いやる余裕もない状況下にあって、しっ
かりと皆で力を合わせてこの災害を乗り越えよう
とする人々の真剣な姿に感銘を受けました。しかし、
倒壊した牛舎の中で圧死した牛を目の当たりにし
て、悲嘆に沈む生産者、本当に痛いほど私も牛飼
いの一人としてやりきれない思いがします。手塩に
かけて育て、家族の一員だった牛が一瞬の内に亡く
なるのです。「自分だったらこの現実を直視するこ
とが出来たのだろうか」とか、「どのように対応して
いくだろうか」を自問自答しても事の重大さに考
えることがしばらくは出来ないと思います。先日某
テレビ局で農村の原風景とも称される震災前の山古
志の四季折々の風景と共にそこで生活を営む人々の
豊かな暮らし振りが紹介されておりました。その中
で、一度途絶えていた闘牛を復活させ、現在に至る
までの経過をたどった場面を興味深く観ました。牛
飼いの先達達が築いてきた伝統・文化を受け継ぎ、
後世に伝えて行こうとする若い牛持ち。牛を生きが
いに穏やかに暮らす老夫婦。一生に一度出会えるか
どうか分からない将来の横綱候補に巡り会い期待を
寄せる牛持ち。この人達を暖かな眼差しを見守る地
域の人々。本当に皆嬉々とした表情をして誇らしげ
にも感じられました。今年は19年振りの大雪が中越
地方を白く覆い尽し、筆舌に尽くし難い苦勞をされ
ていることと思いますが、また自然豊かな美しい山
古志に戻ることを心の支えに復興に向けて一歩ずつ
前に進んでいただきたいと思います。



「酪農経営に 従事して」

酪農経営：

加茂市大字宮寄上 小柳 武典氏

私が酪農に従事してもう3年近く経過します。今思い返すと本当に色々な事がありました。元々酪農の仕事にはあまり興味が無かったので、高校を辞めた後すぐ外の勤めに出ていました。その後諸般の事情で会社を辞める事になりました。ある日父に「人工授精師の資格を取ってこい」と言われ講習に行きました。今思えば、これが酪農の仕事をするきっかけになったのだと思います。講習にはちょうど同じ位の年頃の人達がいてすぐ仲良くなる事ができました。彼らが楽しそうに酪農の話をしているのを聞いて少しづつ酪農に興味が出てきました。無事資格をとる事ができ、いざ自分の家で仕事をする事になかなか大変な仕事であったという事に気づかされました。始めの頃は親に言われた事だけをしていましたが、徐々に仕事を任される事が多くなりました。そんな中で私が一番最初に悩んだのが牛の発情発見方法です。何度教科書を読み直してもなかなか発情が発見できず、種付けも思い通りになりません。獣医さんに診察してもらって「ほとんどの牛が栄養不足」と診断されました。親に言われた通りに飼料給与していたのですが、それでも栄養が足りていなかったのです。私は、「このまま親の言われるままに仕事をしていても今以上に牛の状態を良くする事ができないのではないかな？」また「私自身、自分の納得の行くまでこの仕事を極めてみたい」と思いはじめました。その後、飼料設計の見直し、給与回数の変更、乾乳牛の管理方法、牛舎の環境改善等と色々な事を取り入れてみました。実際給与回数を変更しただけでも軽度の下痢や軟便等が見る見る治って行きました。給与回数を増した事で自由な時間は減りましたが、安心して牛を飼えるのなら私はそれで良いと思いました。これから先も様々な問題が出てくると思いますが諦めず努力を続ければきっと乗り切れると思います。こうして酪農という大変な仕事を選んだ私ですが、夜作業が終わり腹一杯食べて横になっている牛を見ると「今日も一日頑張ったなあ」という達成感と「明日も頑張らなければ」という責任感が出てきます。こんな気持ちを大切に、更なる目標を目指してこれからも頑張っていきたいと思っています。



「私の養豚経営」

養豚経営：

弥彦村大字村山 本多 正始氏

私は昭和42年に高校を卒業すると、父が行っていた母豚2～3頭の繁殖経営を受け継ぎ、母豚10頭の一貫経営と稲作の複合経営を開始しました。父は私が卒業すると同時に農協に勤め始めたため、稲作と養豚は全部任せられました。父は私に任せる事で、本人が自覚して責任を持ち、いろんな経験から少しづつ農業を理解しやる気を起こすのではと期待したそうです。

そんな父の私に対する思いやりと理解のお蔭で農業を専業としてやろうと言う気持ちになったのだと思います。その後、昭和47年に村内の7名と今の養豚団地を設立し、母豚50頭の一貫経営に取り組みました。そのころ、経営診断(コンサル)を何度も受診し畜産コンサルタント団員の皆さんからいろいろ指摘を受けました。こんな事から数字の大切さ、経営面等、いろいろな事を学び、今でもその教えが生きているように思います。時の経過とともに母豚規模も80頭、120頭と増頭し、今のグループの人達と出会い、入会させてもらいました。このグループは農場データ、財務データ等の数値を非常に大切に、有効に活用しており、それに基づいて適切な助言や改善指導を受けております。昭和62年に有限会社を設立し、平成7年には長男が経営に参画したので、更に母豚を180頭規模に増頭しました。長男は農業大学校卒業後、グループ内の農場で3年間研修を行い、いろんな勉強をさせてもらっています。この事で今は繁殖部門を全て責任を持って担当しております。私の養豚人生の間にはいろんな出来事がありました。その中でも平成11年7月の火災の時は大きな精神的なショックを受けましたが、グループの人達や地域、関係機関の方々の励ましや助言を受け何とか「やる気」を取り戻しました。本当に皆さんに感謝しております。今後は母豚350頭規模を目標に、枝肉価格350円台でも利益が確保できる経営体質に強化して、更に努力して行こうと思っています。